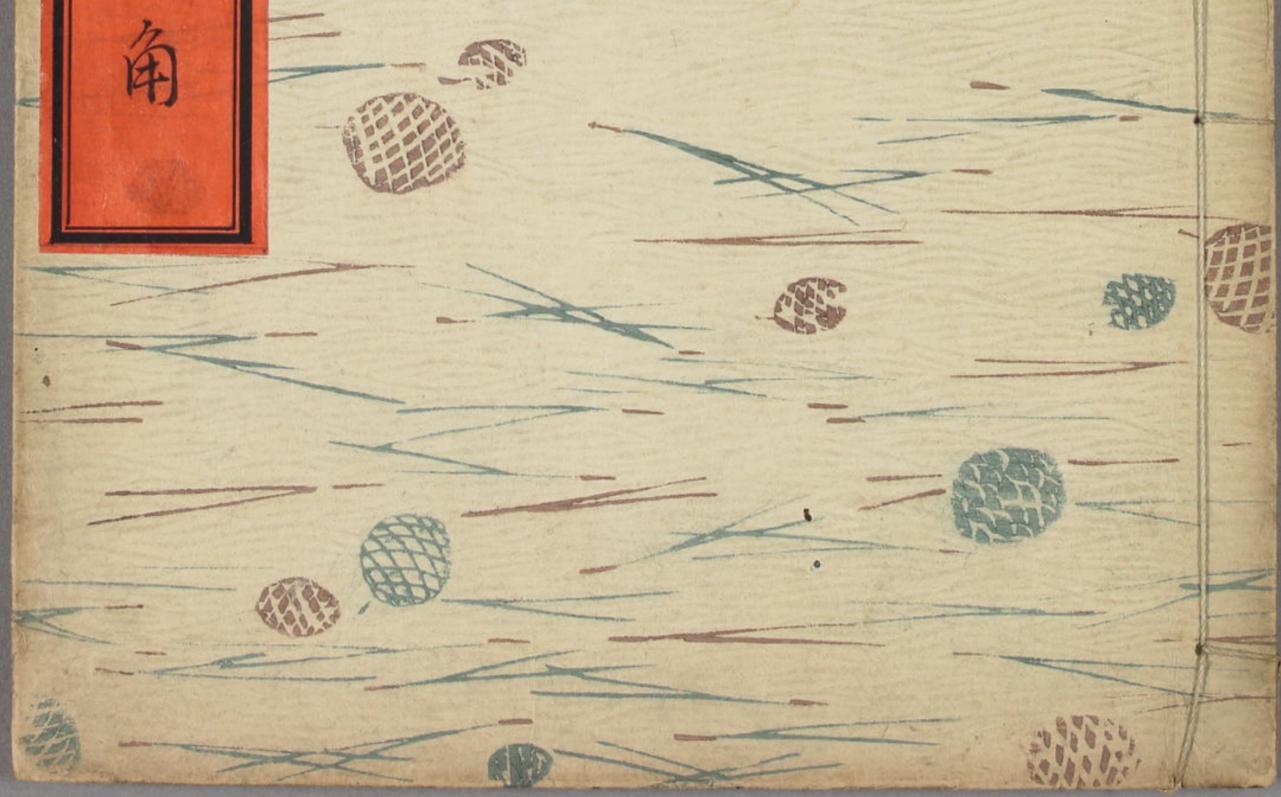




琴曲類纂

角

卷之三  
 江戸諸流淨瑠璃語  
 略傳系圖  
 淨瑠璃作者名譜



聲曲類集卷之三

目錄

薩摩淨雲	門人の	吉原浄雲		杉山丹後掾
江戸肥前掾	子持の	吉門掾		吉原浄雲
櫻井丹波少掾	子持の	落後掾		油屋浄雲
鳥巻次郎吉		河部浄雲		結城孫三郎
天満八吉		石見掾		佐藤七吉
吾妻新四郎		江戸孫三郎		村山金吉
大坂吉吉		對馬五郎		伊勢大掾
南北十吉		瑞屋源三郎		近江大掾
土佐少掾	子持の	薩摩外記	門人の	廣瀬或吉



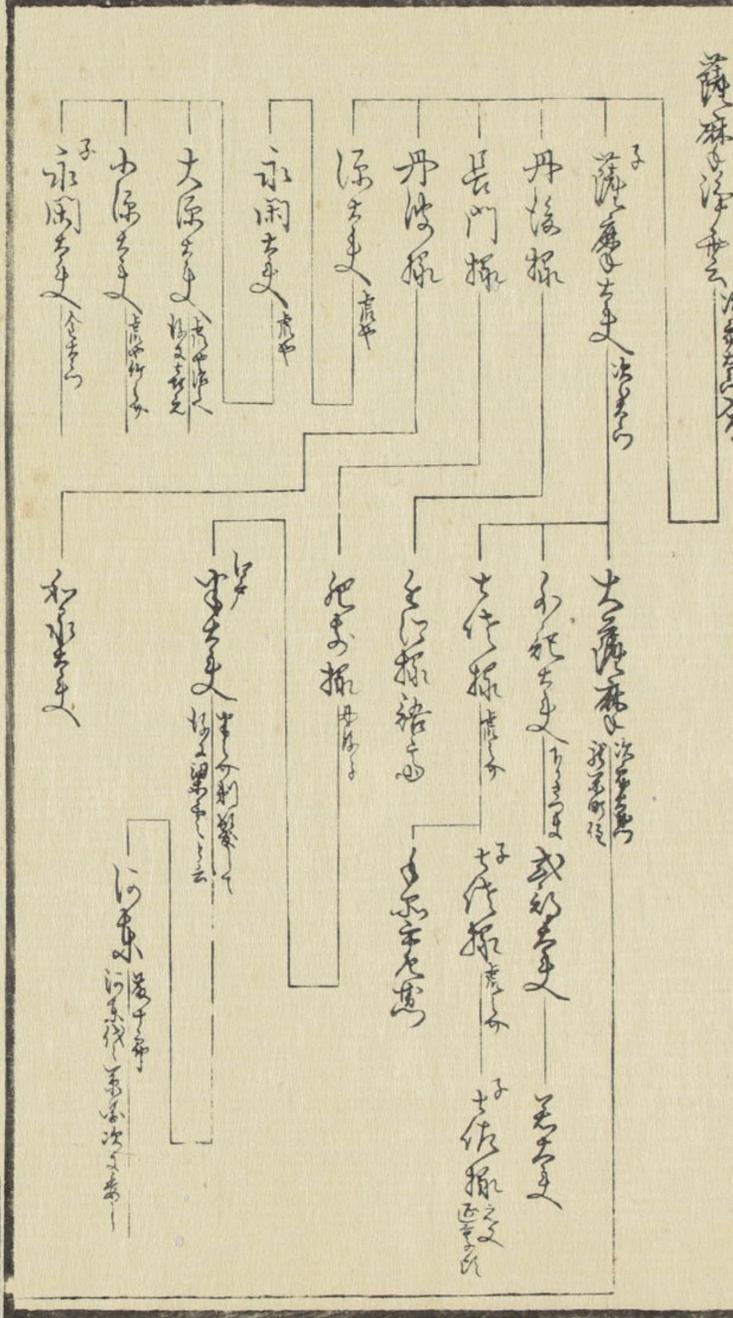
一はにわあまのうらまはは師のこころをわがこころにうつすものなり  
せしむるまじきことありしにやとては師のこころをわがこころにうつすものなり  
を二層とてしめしむるは師のこころをわがこころにうつすものなり  
の目録にしてしめしむるは師のこころをわがこころにうつすものなり  
居館よりしめしむるは師のこころをわがこころにうつすものなり  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
人教師のこころをわがこころにうつすものなり  
少年を以ててしめしむるは師のこころをわがこころにうつすものなり  
あつてしめしむるは師のこころをわがこころにうつすものなり  
某處の故にしめしむるは師のこころをわがこころにうつすものなり  
年々まじきことありしにやとては師のこころをわがこころにうつすものなり  
あるんれとてしめしむるは師のこころをわがこころにうつすものなり

羅山文集卷七十隨筆六曰  
今茲五月廿八日被賓友誘導且應其主人招而携向陽讀畊二子往赴  
焉堂內假構棚層疊檀張惟高二丈許長數丈為傀儡之戲技也其木  
偶或男女僧俗或天仙神女或介士武夫或騎馬擔夫有舞蹈者有擊扇  
打鼓者有踊躍者有盪舟棹歌者有戰死而身首異處者有衣冠者有放  
矢者振棒者恭棋捧蓋傘者或為龍蛇或為飛物或為狐且舉火于尾見  
者皆惟之始自巳午之交至于脯其隱在棚底歌者聲有上有下有細有  
巨有鼓吹笛琴應於木偶之動而有曲節且操之引之且蹈板以喚者與  
木偶相得不異殆如生矣今日所為者江戸第一之傀儡師號小平太近也

傀儡子此為巧手云余思陣平以奇計解平城之圍高祖脫去史漢共  
稱事秘世無知焉然桓譚應劭之輩推測其側聞謂陣平為傀儡戲闕氏見  
其木偶婦人之美以為漢多美女單于取漢則得美人為我仇忽媚妬之  
心發而勸單于止戰却兵今之所觀已如常人况平之奇計傀儡子之活  
動乎余初以此為兒戲而少信多疑於是思其奇謀之不虛也梁鎗詩云  
刻木牽絲作老翁雞皮鶴髮與真同須臾用了寂無事却似人生夢中  
余想像于陳曲逆之秘計復有所感于梁鎗詩歟

五言古詩  
結のよきし海子よあふの海を舟具し海陽橋人の衣袋にすかたあはれはるの影影不結構をよせ  
かむるを海子よあふの海を舟具し海陽橋人の衣袋にすかたあはれはるの影影不結構をよせ  
海子よあふの海を舟具し海陽橋人の衣袋にすかたあはれはるの影影不結構をよせ  
の影影不結構をよせ  
官のよきし海子よあふの海を舟具し海陽橋人の衣袋にすかたあはれはるの影影不結構をよせ  
はるの影影不結構をよせ  
けし海子よあふの海を舟具し海陽橋人の衣袋にすかたあはれはるの影影不結構をよせ  
かむるを海子よあふの海を舟具し海陽橋人の衣袋にすかたあはれはるの影影不結構をよせ  
一版つれはりのねをわがこころにうつすものなり  
せよまじきことありしにやとては師のこころをわがこころにうつすものなり  
あつてしめしむるは師のこころをわがこころにうつすものなり  
某處の故にしめしむるは師のこころをわがこころにうつすものなり  
年々まじきことありしにやとては師のこころをわがこころにうつすものなり  
あるんれとてしめしむるは師のこころをわがこころにうつすものなり

是世傳自以公存存其人標所  
 古之佐標が如くを以てし  
 古海に其の佐標を以てし  
 年々その可なりとすべし

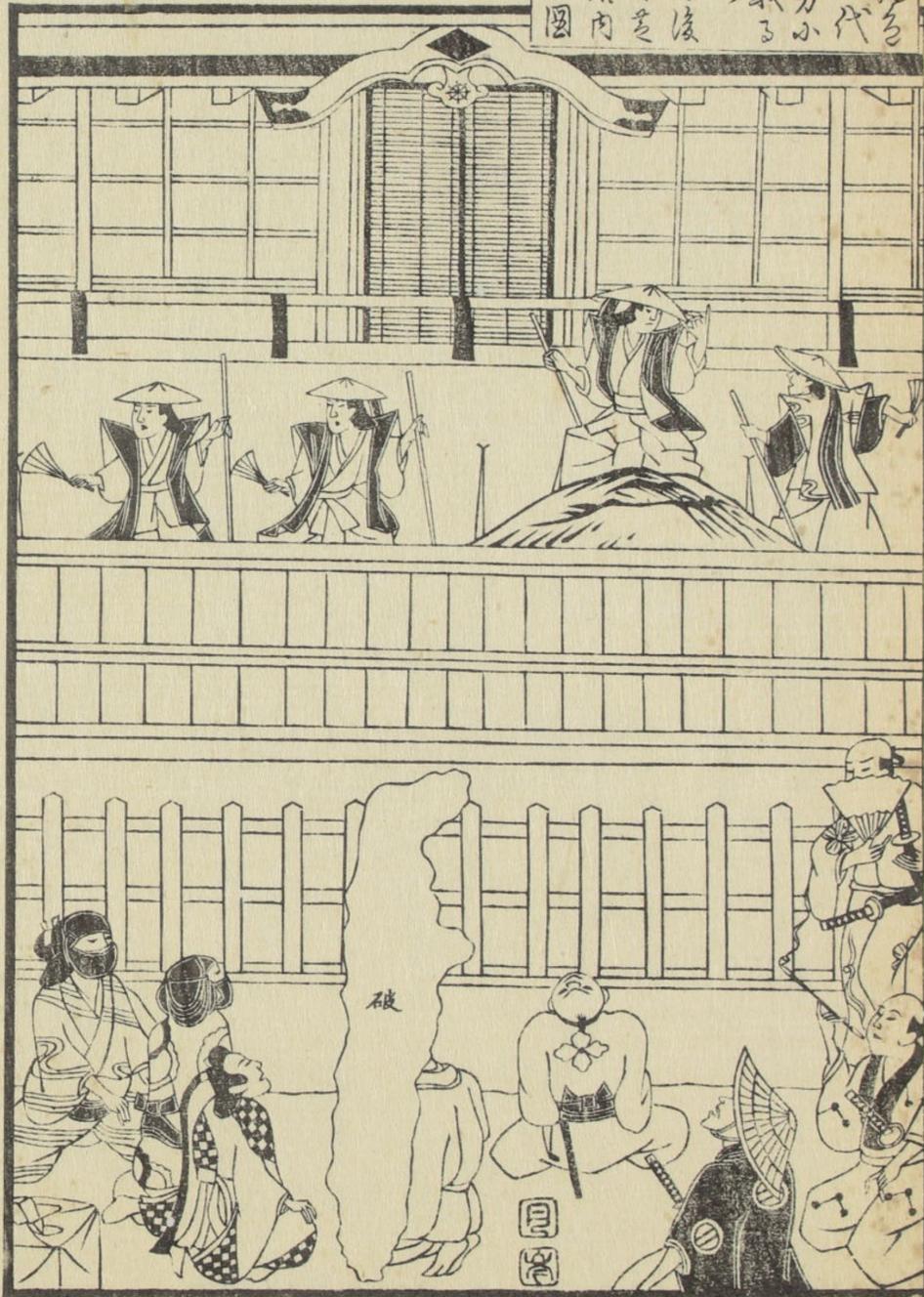


此の如く世傳小吉原、佐標の標所を以てし  
 流し屋を以てし 流し屋の  
 丹波を以てし 丹波  
 丹波標を以てし 丹波標  
 丹波標を以てし 丹波標  
 丹波標を以てし 丹波標

流し屋を以てし 流し屋の  
 丹波を以てし 丹波  
 丹波標を以てし 丹波標  
 丹波標を以てし 丹波標  
 丹波標を以てし 丹波標



好む一男不丹探居の  
る小載る後内圓



ら  
探居在舞の以空又の一派と況んや一服を飲んては  
易に思ひ出づる事ありき  
のまじりては  
此のまじりては  
此のまじりては  
此のまじりては

此のまじりては  
此のまじりては  
此のまじりては  
此のまじりては

此のまじりては  
此のまじりては  
此のまじりては  
此のまじりては

長門探

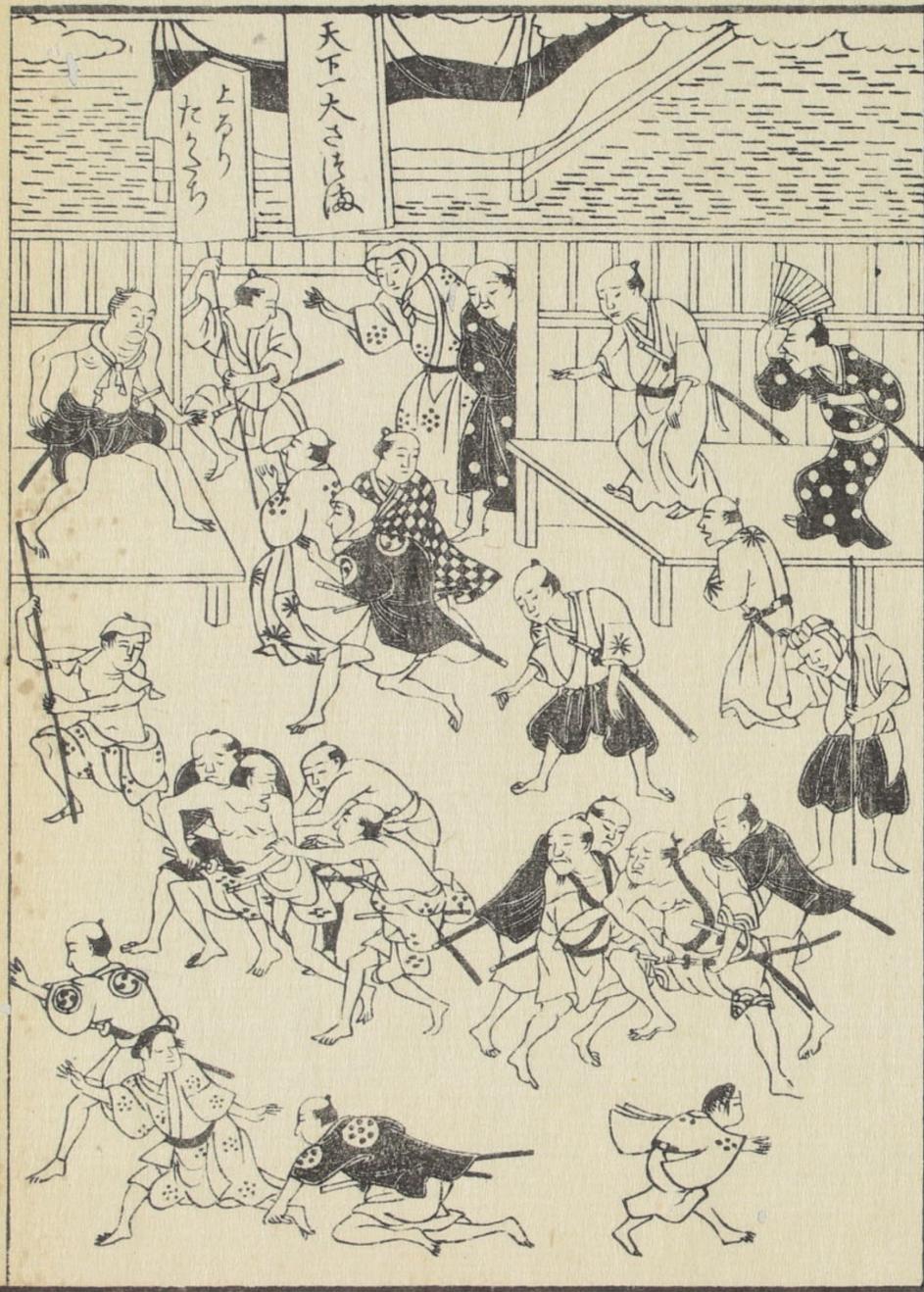
此のまじりては  
此のまじりては  
此のまじりては  
此のまじりては

吉原屋 永剛  
看板より大なる虎をかく

此のまじりては  
此のまじりては  
此のまじりては  
此のまじりては







江戸名所記  
巻下



三ノ七



大正華其傳洋うじつとけり次海に流る

流経



信城録と云

善左衛門と撰在無り

傳はしるは傳りたり結と信城録と云と云流経と云と善左衛門  
右教文舎をとりか始りたりと云云傳りたりと云

天澤八右衛門

堺町撰在

船政新書を撰りて海に流る

同

天下

石見振養名守信

堺町撰在

同



信濃七右衛門と云

堺町撰在

同

五妻新四郎

堺町撰在

船政新書

同

江戸藤四郎

堺町撰在

船政新書

幸丸流経と云

村山と云

同撰

大坂七右衛門

善左衛門の撰りて海に流る

大正華其傳洋うじつとけり次海に流る

大正華其傳洋うじつとけり次海に流る

對馬之市虎也

本撰町撰在

之撰りて海に流る



伊勢大振

堺町撰在

船政新書

南江十右衛門

本撰町撰在

善左衛門の撰りて海に流る

本撰町撰在  
船政新書を撰りて海に流る

大正華其傳洋うじつとけり次海に流る

近江大振録と云

本撰町撰在

外見

大正華其傳洋うじつとけり次海に流る  
船政新書を撰りて海に流る

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...



名乗りの所  
虎の爪の所  
まきよしのつら



天下 藤原外記

二代目藤原外記

中一わたり... 藤原宮内

たすき... 藤原宮内

わたり... 藤原宮内

くわく... 藤原宮内

廣瀬式部

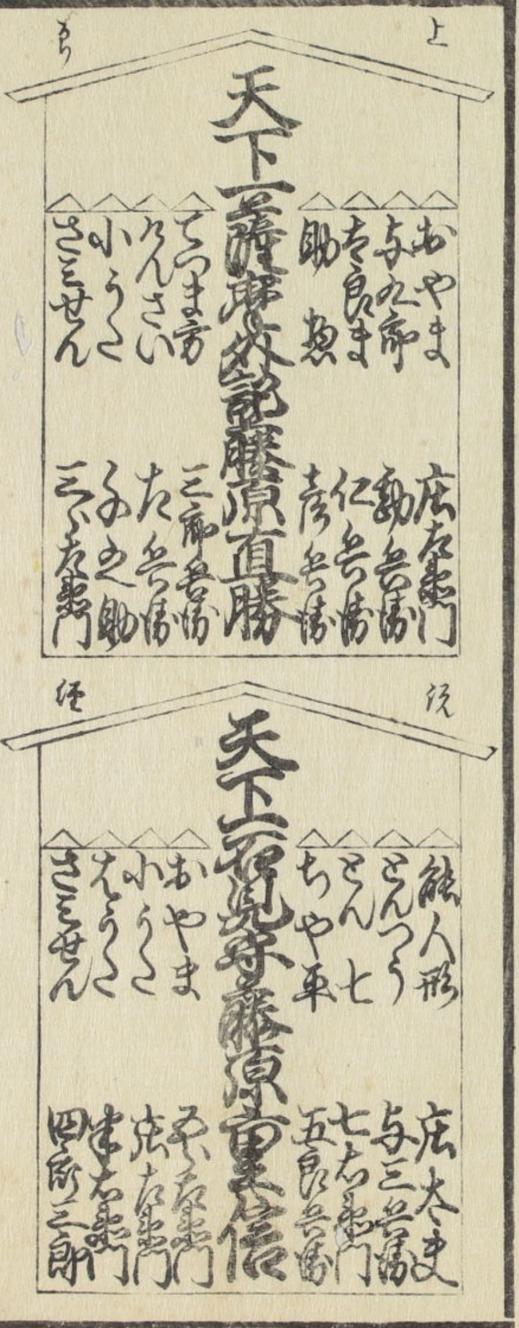
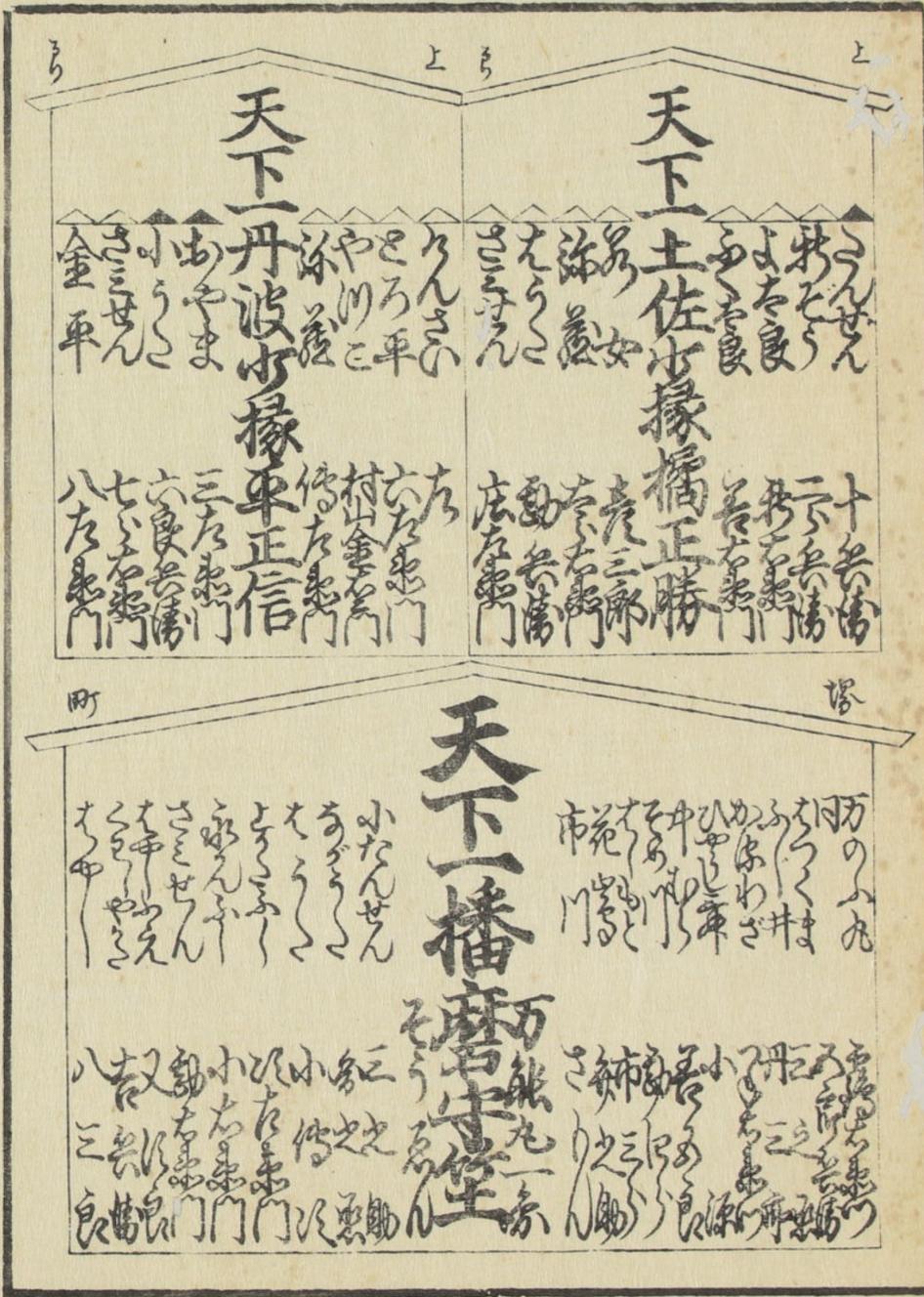
土佐探門人

のり... 藤原宮内

土佐探門人

曲... 藤原宮内

或... 藤原宮内



世傳といふ古歌の傳るるごとく...  
 藤原...

自平家...  
 ...



奉命の如き我

二辰月録のあり

中野勇士鑑

二辰月を事人

湯たの速恨新下信

二辰月録あり

早女殿の定

二辰月録あり

出せぬ久

二辰月録あり

景信雷同巻

二辰月録あり

空登極持

二辰月録あり

二辰月録あり

香代時津包

二辰月録あり

神子山根治祐

二辰月録あり

林平中領

二辰月録あり

愛美の神と人

二辰月録あり

古今七人書

二辰月録あり

忠長京まき

二辰月録あり

重信中務

二辰月録あり

房信後中村

二辰月録あり

百日の戦

二辰月録あり

古月神

二辰月録あり

名女對面用権系置

貞任責

好まざる助

二辰月録あり

山階大五郎

二辰月録あり

二辰月録あり

二辰月録あり

二辰月録あり

二辰月録あり

その外一辰録ありの権系置あり



二辰月録あり

二辰月録あり

河東居士 氏伊藤又拾寸見武州江戶品川坊之豪家也其粟跌  
宕不羈嗜酒遠嬉脫然破產灑不威武不能屈富貴不得淫恰有天  
子呼來不上船之氣象嘯嘯花號十寸見堂故以氏焉後遁世遊梁  
雲門而極青於藍矣花樓月殿一開口過行雲動梁塵水則舞蛟虬山  
則泣鸞鹿日高門豪家見寵月為花街草臺見貴寔絕代之望君也行  
年四十有二享保乙巳秋七月廿日以病卒葬地本願寺塔成勝  
寺即喪者以千數孝男夕丈君前學于門後養于家善其紹其業成二  
代之美家聲日月彩色已而一紀之辰立碑於本堂階側友人謹書陰  
焉  
享保十年乙巳七月廿日 十寸見河丈建  
十寸見夕丈建

河東居士 氏伊藤又拾寸見武州江戶品川坊之豪家也其粟跌  
宕不羈嗜酒遠嬉脫然破產灑不威武不能屈富貴不得淫恰有天  
子呼來不上船之氣象嘯嘯花號十寸見堂故以氏焉後遁世遊梁  
雲門而極青於藍矣花樓月殿一開口過行雲動梁塵水則舞蛟虬山  
則泣鸞鹿日高門豪家見寵月為花街草臺見貴寔絕代之望君也行  
年四十有二享保乙巳秋七月廿日以病卒葬地本願寺塔成勝  
寺即喪者以千數孝男夕丈君前學于門後養于家善其紹其業成二  
代之美家聲日月彩色已而一紀之辰立碑於本堂階側友人謹書陰  
焉  
享保十年乙巳七月廿日 十寸見河丈建  
十寸見夕丈建

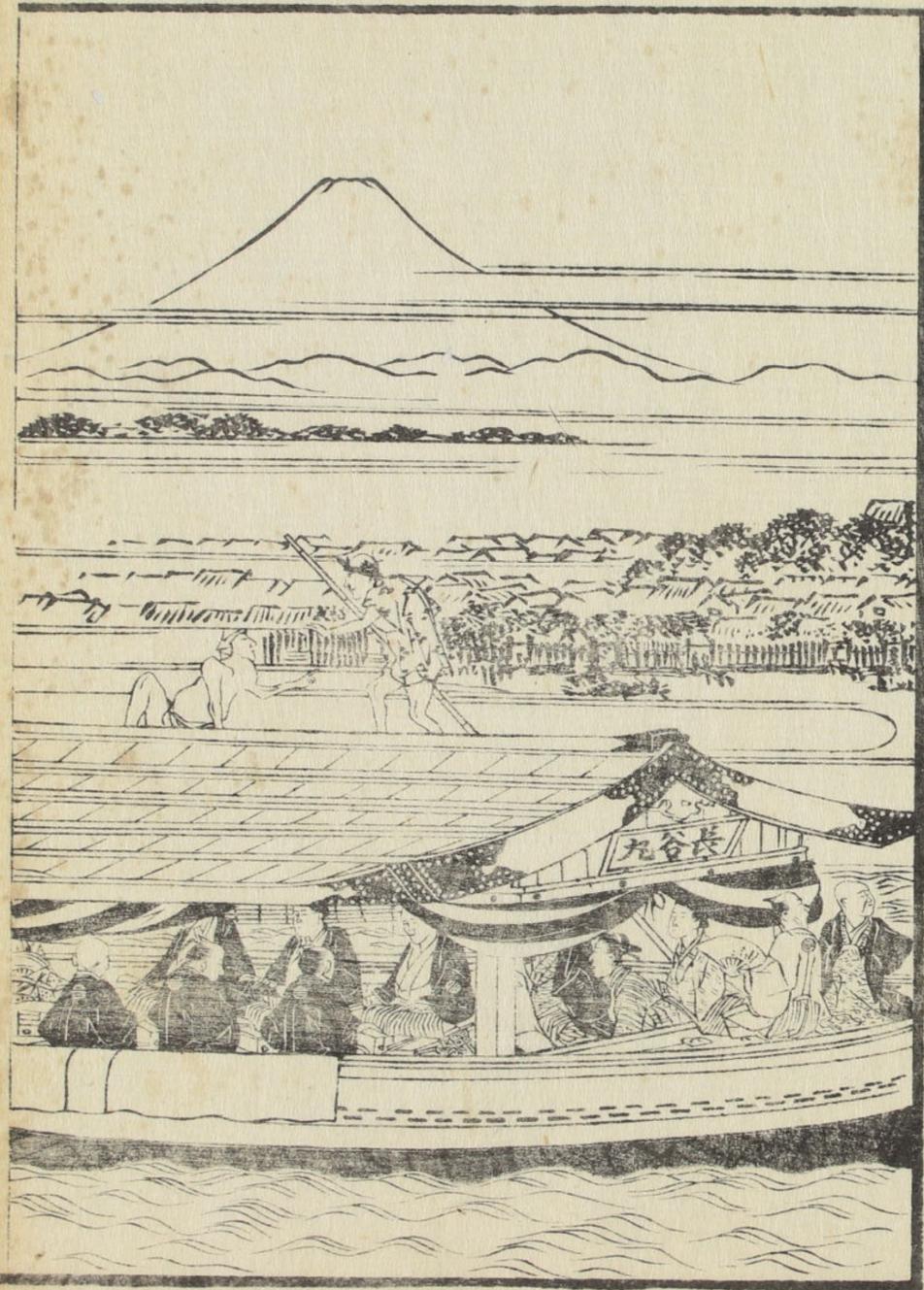
右の石碑の文は西の大夫の撰とて疑はれりて碑を削る者ありて天保癸巳四月改定也  
因甲午の大雨の災に於て欠換

河東居士の墓は年々高き草に覆はれりて代用を次第に河東宛中に建てること  
三代 河東居士 墓 河東居士の墓 河東居士の墓

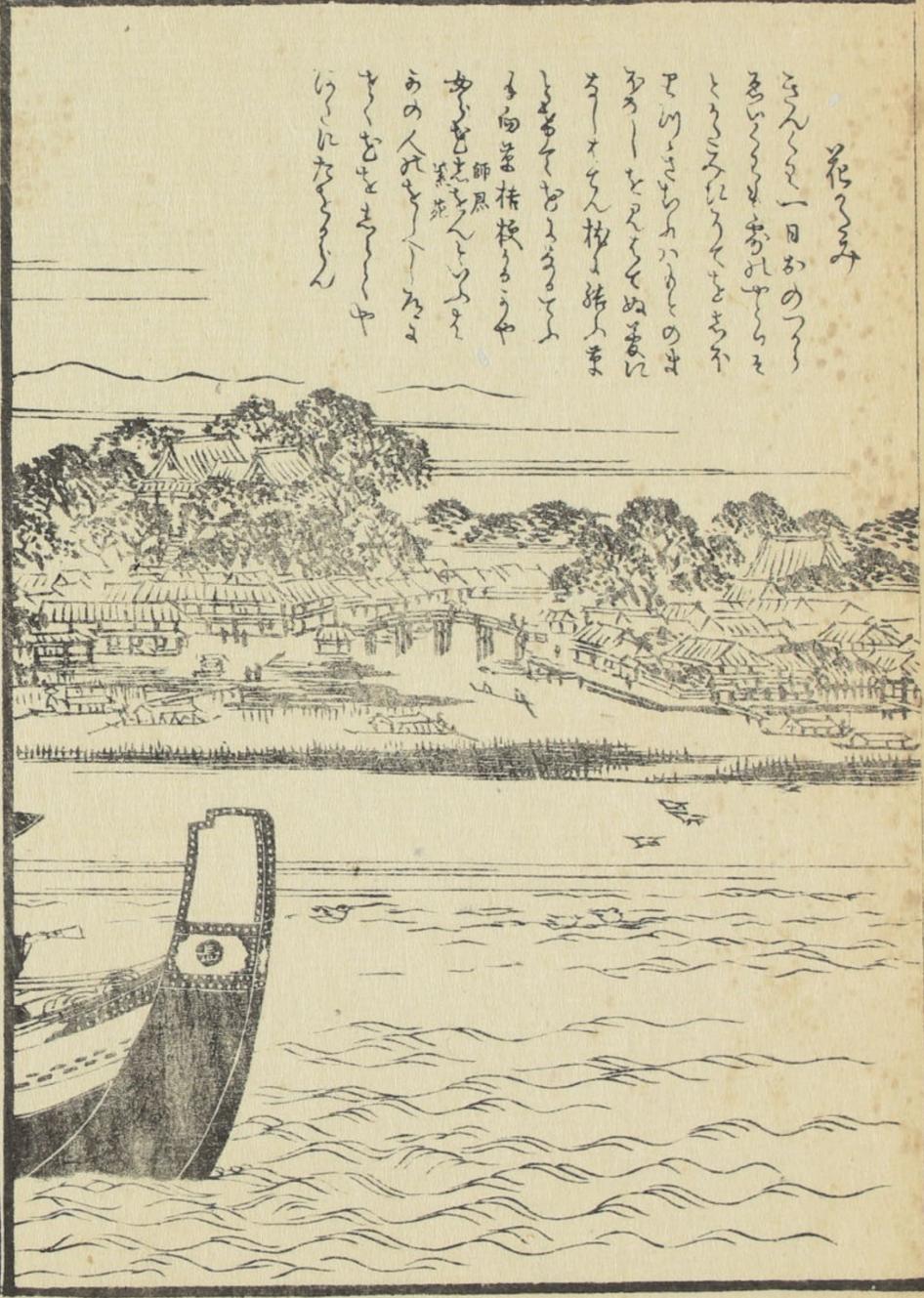
河東居士の墓は年々高き草に覆はれりて代用を次第に河東宛中に建てること  
三代 河東居士 墓 河東居士の墓 河東居士の墓





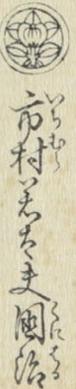
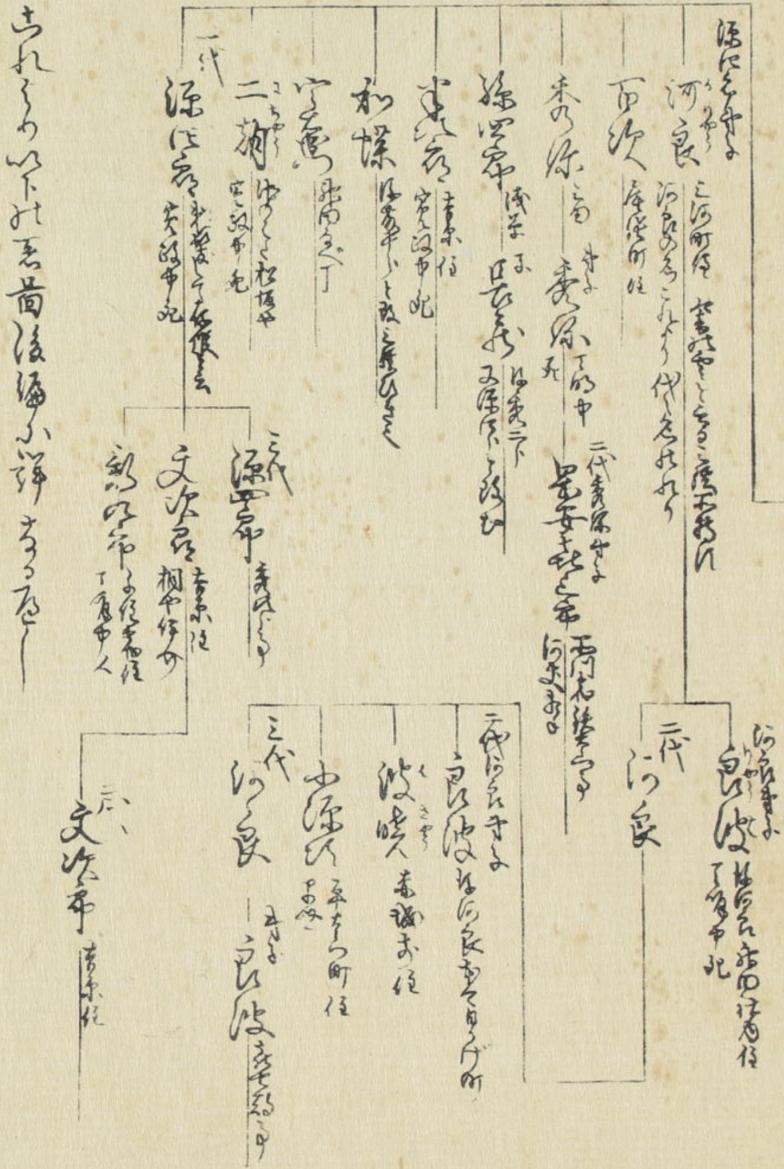


花見  
 さんくさ一日おのつ  
 さいさいもあはれや  
 とうきんはうきをさ  
 ずめさうはんの  
 ありーをえとぬまに  
 ちーせん柳よけんま  
 しもておふさ  
 ち向茶栴枝  
 ちもとんしん  
 あの人れ  
 ちもとん  
 ちもとん



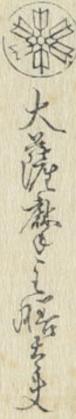


二八廿  
山崎海江平 始村上流江平



大月市村羽左衛門河村が子や成りて人々を以て

紹養養子に月お勤む



寛保迄方々以て行々

舟のりて大流海を渡り

はつまた内が舟のりて

と居てた月甲乙

と居てた月甲乙

と居てた月甲乙

と居てた月甲乙

と居てた月甲乙

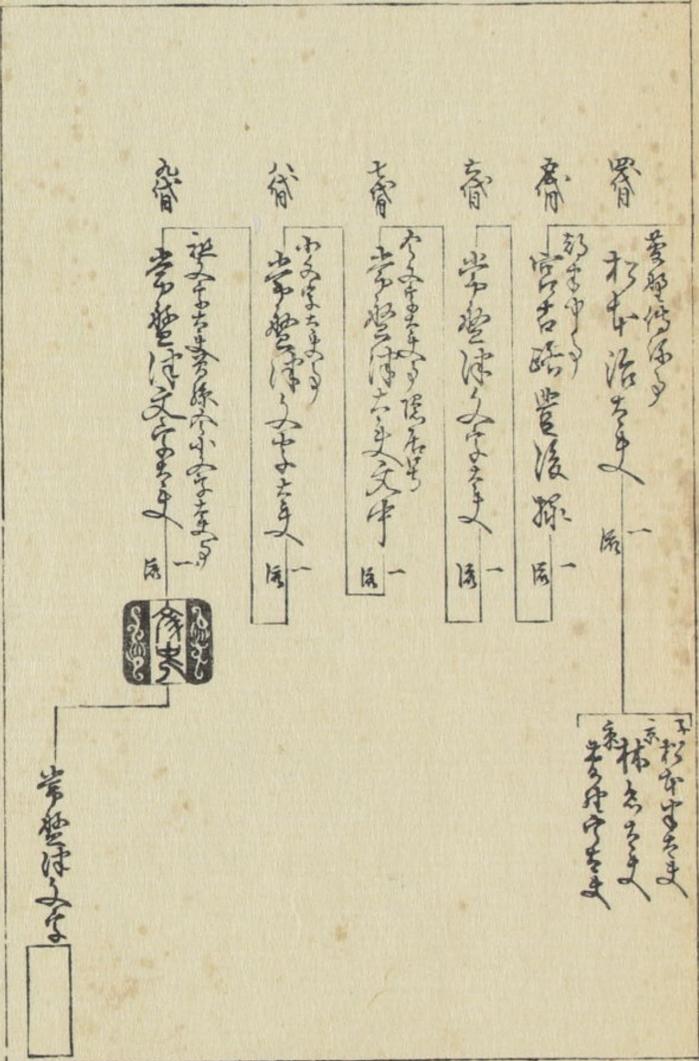
と居てた月甲乙

と居てた月甲乙

と居てた月甲乙



常盤康之祖傳書中子孫傳書



三二五



豊久賀送返書

之祖文の事は門人より家傳の如くも名人より傳授せられたる事なり  
同文傳書より同文傳書より同文傳書より同文傳書より同文傳書より



常盤傳書

之祖文の事は門人より家傳の如くも名人より傳授せられたる事なり  
同文傳書より同文傳書より同文傳書より同文傳書より同文傳書より



常盤傳書

之祖文の事は門人より家傳の如くも名人より傳授せられたる事なり  
同文傳書より同文傳書より同文傳書より同文傳書より同文傳書より



常盤傳書

之祖文の事は門人より家傳の如くも名人より傳授せられたる事なり  
同文傳書より同文傳書より同文傳書より同文傳書より同文傳書より

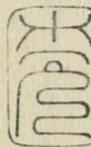
樹中殿馬を以

元祖豊後掾の一人にして一派を以て樹中と改む 樹中の殿の 樹中殿を以て改む



富永代の樹中殿

氏系縁圖



元文の末宮古路の曲帯 樹中殿 其好小く其好小く其好小く

今よりお供も 樹中殿 其好小く其好小く其好小く

新よりお供も 樹中殿 其好小く其好小く其好小く

其好小く其好小く其好小く

其好小く其好小く其好小く

其好小く其好小く其好小く



富永代の樹中殿

氏系縁圖

元祖豊前掾 樹中殿 其好小く其好小く其好小く

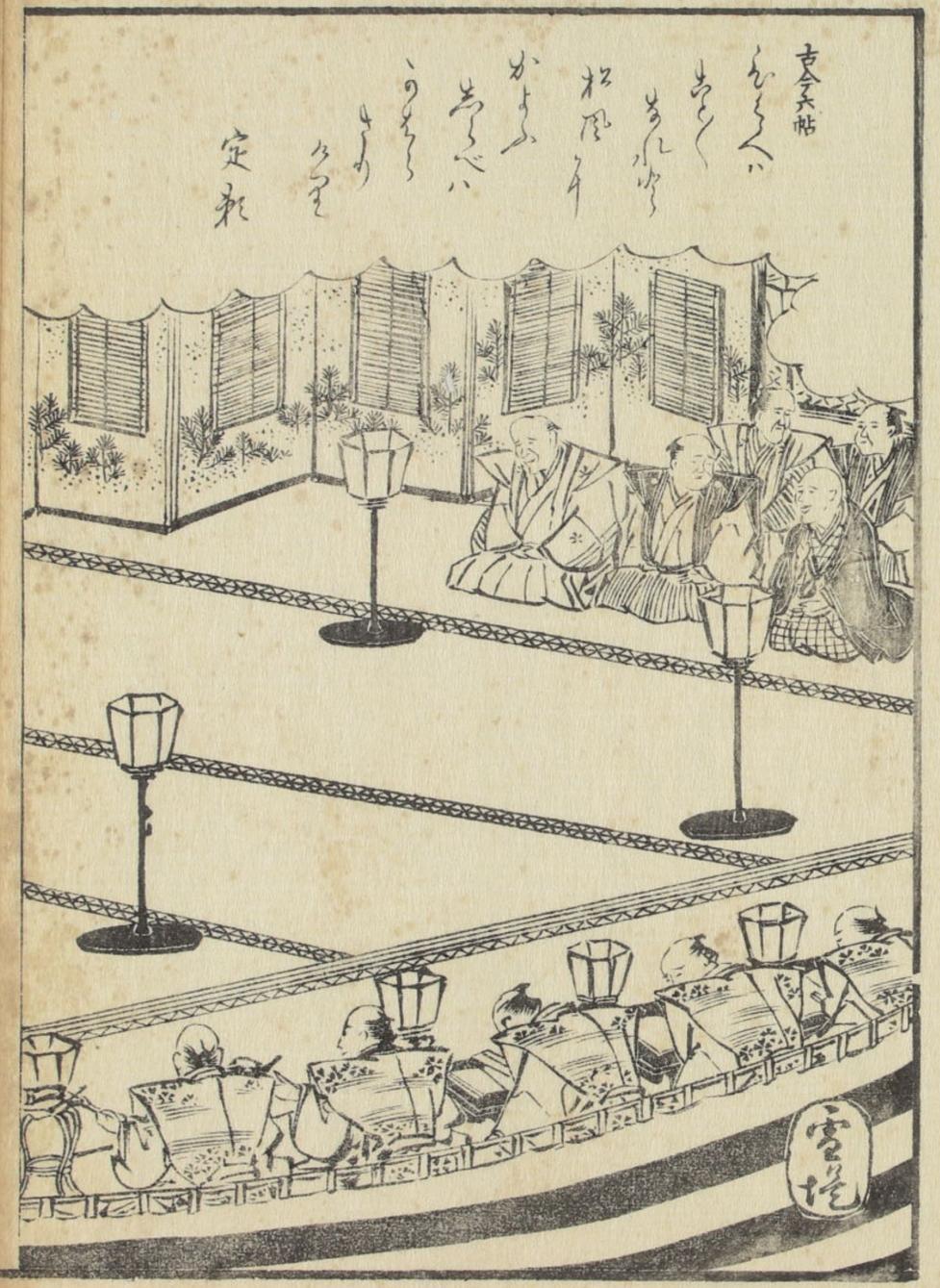
改名一後



別墅にて延壽寺と号す  
延壽寺の名は其の  
 地方より賜ふ所とす  
 享和二年戊午月十八日七十一才に  
 一々病に終せり本所中の心成控より葬行

清元延壽寺 本所より目住

横山所より一茶并ゆを齎し園村屋敷を割り男あり幼名吉左衛門と号し  
 幼より淨瑠璃を好み延壽寺に随月一々本宮古史の名を譲り父延壽寺  
 の振を勤む師役を及ぶり文化五辰年豊後津海を交りいり  
この時紋面を海  
 浪を辨ふ  
 然るに清水の姓陸人の子を勤む清水氏の末荒井某の舎に入り  
 改め清水と名のり文化十一年市村屋敷一時在り清水を改め清元と  
 号し延壽寺を交り清水の屋敷をとりて一派の曲節を傳へて世に貴き  
 る藉契し二世の延壽寺と云文政八年五月廿六日終せり法善宗海川  
 淨心寺に葬行門人數ありと道阿弥



吉美帖  
 一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

清元格古本此末子太田南歌子清元延壽の四字を句に上りて清元格なり

清怨 搗 絃 曲 貫 珠

元 間 此 調 滿 東 都

延 招 共 賞 陽 春 雪

壽 席 歡 場 待 太 夫

遠 櫻 山 人

余子已之注云以兼壽を文と号兼壽の名は其の又彼一は延壽を文と

改め世を行くべき一併を厚敷子併厚敷の名は其の一併を厚敷を圓村を蘇を圓と云ふ

江化甲辰の冬亦改めく太夫間と云ふ蘇の名は其の圓村を兼壽を文と云ふ



富士和庵齋抄

おん 延 櫻 山人

言古此書後採りて付ふて此の書は其の書とてし解し終りては延壽

四年外以守村の末延壽 富士古薩齋抄 改二派と号す門人 鶴が末を文と

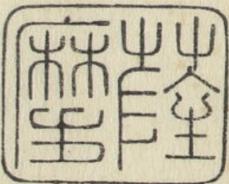
師の流を一雲と一延壽とを換極しつと云ふ門人 鶴が末を文と

加言古更須か末を文と延壽とを換極しつと云ふ門人 鶴が末を文と

古年か末を文と延壽とを換極しつと云ふ門人 鶴が末を文と

か言古更須か末を文と延壽とを換極しつと云ふ門人 鶴が末を文と

鶴が末を文と



鶴が末を文と

富士古薩齋抄

言古此書後採りて付ふて此の書は其の書とてし解し終りては延壽  
師の流を一雲と一延壽とを換極しつと云ふ門人 鶴が末を文と  
加言古更須か末を文と延壽とを換極しつと云ふ門人 鶴が末を文と  
古年か末を文と延壽とを換極しつと云ふ門人 鶴が末を文と  
か言古更須か末を文と延壽とを換極しつと云ふ門人 鶴が末を文と







赤野之  
 機 文輝 門田信之助 銀田之助  
赤野之助 赤野之助 赤野之助 赤野之助  
赤野之助 赤野之助 赤野之助 赤野之助

梅田信之助 河井金次 中村少之 大里常兵衛 門田新七 津井信之助 平田之助 平田之助 中村角止 中村吉人 近松門喬 勝徳兵衛 村家常次 吉野井田平  
梅田信之助 河井金次 中村少之 大里常兵衛 門田新七 津井信之助 平田之助 平田之助 中村角止 中村吉人 近松門喬 勝徳兵衛 村家常次 吉野井田平

中村少之 大里常兵衛 門田新七 津井信之助 平田之助 平田之助 中村角止 中村吉人 近松門喬 勝徳兵衛 村家常次 吉野井田平  
中村少之 大里常兵衛 門田新七 津井信之助 平田之助 平田之助 中村角止 中村吉人 近松門喬 勝徳兵衛 村家常次 吉野井田平

中村少之 大里常兵衛 門田新七 津井信之助 平田之助 平田之助 中村角止 中村吉人 近松門喬 勝徳兵衛 村家常次 吉野井田平  
中村少之 大里常兵衛 門田新七 津井信之助 平田之助 平田之助 中村角止 中村吉人 近松門喬 勝徳兵衛 村家常次 吉野井田平

中村少之 大里常兵衛 門田新七 津井信之助 平田之助 平田之助 中村角止 中村吉人 近松門喬 勝徳兵衛 村家常次 吉野井田平  
中村少之 大里常兵衛 門田新七 津井信之助 平田之助 平田之助 中村角止 中村吉人 近松門喬 勝徳兵衛 村家常次 吉野井田平

福吉之助 宗田常兵衛 松井由輔 松井常三  
福吉之助 宗田常兵衛 松井由輔 松井常三  
福吉之助 宗田常兵衛 松井由輔 松井常三

木村紅粉助 赤門七之助 赤門七之助 田中常三  
木村紅粉助 赤門七之助 赤門七之助 田中常三  
木村紅粉助 赤門七之助 赤門七之助 田中常三

中尾常七 赤井兵衛 赤井兵衛 赤井兵衛  
中尾常七 赤井兵衛 赤井兵衛 赤井兵衛  
中尾常七 赤井兵衛 赤井兵衛 赤井兵衛

田中常三 赤井兵衛 赤井兵衛 赤井兵衛  
田中常三 赤井兵衛 赤井兵衛 赤井兵衛  
田中常三 赤井兵衛 赤井兵衛 赤井兵衛

此類之名 草紙 多 尚好 備 小 備 多  
此類之名 草紙 多 尚好 備 小 備 多

三十一

